

「聖霊は教える」

ルカの福音書 12:6~12

はじめに

まずは前回の補足をします。

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:6 五羽の雀が、ニアサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいません。

12:7 それどころか、あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、多くの雀よりも価値があるのです。

このイエシュアがたとえられた「五羽の雀」と「ニアサリオン」というのは「モーセ五書」と呼ばれるトーラー、そして「預言書」ネビーイームと「諸書」ケスビームからなるタナフすなわち「旧約聖書」全体を指し示していると述べました。そしてその御言葉のうちの一点一画も消え去ることなく、すべてが成就する（マタイ 5:18）というのが「そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいません」というたとえの意味であると解釈し述べました。そして続いて「あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています」とも言われていますが、これは同じルカの 21:18「しかし、あなたがたの髪の毛一本も失われることはありません」という表現に言い換えることができるものであり、つまり先の「雀の一羽」とこの「髪の毛一本」のたとえの意味は同じであると考えられ、すなわちここでは旧約聖書、タナフに記されたすべての預言は一つも違わず必ず成就するのだということが、二つのたとえによって繰り返され、強調されているのです。ですからこの箇所は、私たち一人ひとりの命の重さや存在の価値の尊さを表したものであるというよりはむしろ聖書の御言葉の重要性、その一つひとつの価値の尊さを示したものであり、まさに前回取り上げた「ルカ 12:2 おおわれているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずにすむものはありません。」という、聖書に記された、いや隠されている預言が、必ず現わされる、まさに一点一画も消え去ることなくすべてが成就する、ということが強調されている箇所であったのです。

しかし、そのような御言葉すなわち神のご計画において「あなたがたは…価値がある」だから「恐れることはありません」ともここでイエシュアは語っておられます。つまり神のご計画が明らかにされる、現わされる、成就するということは、私たち一人ひとりの価値もまた明らかにされるということです。ここで「価値がある」という意味で使われるヘブル語ヤーカール(ךק?)は本来、「まれに、ほとんどない」という意味で使われ（Iサムエル 3:1）、それは「主の御言葉を語る、幻を解き明かす」ことを指し示した言葉なのです。

Iサムエル記【新改訳 2017】

3:1 さて、少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。そのころ、主のことはまれにしかなく、幻も示されなかった。

つまり「あなたがたは…価値がある」とは、主の御言葉を語り、解き明かし、現わすための存在であり、そのような目的、役割を与えられた者であるということなのです。何もしなくてもただその存在に価値があるということではなく、私たちには主からこのような役割が与えられているのです。そのような流れで、続く今日取り上げる内容は、私たちが何をどのように語るかということに焦点が置かれています。

1. 認める

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:8 あなたがたに言います。だれでも人々の前でわたしを認めるなら、人の子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。

「認める」という意味のヤーダー(הָדַר)の初出箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

29:35 彼女はさらに身ごもって男の子を産み、「今度は、私は主をほめたたえます」と言った。それゆえ、彼女はその子をユダと名づけた。その後、彼女は子を産まなくなった。

このように、ヤーダーは本来「主をほめたたえます」という意味であり、アブラハム、イサク、ヤコブの子「ユダ」すなわちイスラエル十二部族のユダ族を指し示す言葉なのです。彼の父はこう預言しました。

創世記【新改訳 2017】

49:9 ユダは獅子の子。わが子よ、おまえは獲物によって成長する。雄獅子のように、雌獅子のように、うずくまり、身を伏せる。だれがこれを起こせるだろうか。

49:10 王権はユダを離れず、王笏はその足の間を離れない。ついには彼がシロに来て、諸国の民は彼に従う。

これはやがてユダ族の子孫から王が出て、その支配は決して終わらないという預言です。主イエシュアこそがその御方であることは系図を見ればそれは明白です（マタイ 1:3～16）。そしてこの御方が「ついには彼がシロに来て、諸国の民は彼に従う。」ともあります。「シロ(הַשִּׁלּוֹן)」とはシャーラー(הָשָׁרָר)「栄える、子孫を与える（Ⅱ列 4:28）」という言葉の派生語です。つまりユダの獅子である王イエシュアは栄え、イスラエルの民を増やし、ついにはすべての国々をも治めるという預言です。この事実を認め、そのような御方としてイエシュアを「ほめたたえ」ること、それが「わたしを認める」という言葉の意味です。

そしてそのようにイエシュアを認める者を、イエシュアは「神の御使いたちの前でその人を認めます」と言われていました。ではこの「御使いたちの前で」とは一体どういうことなのでしょう。以下の預言を見てください。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:2 また私は、もう一人の御使いが、日の昇る方から、生ける神の印を持って上って来るのを見た。彼は、地にも海にも害を加えることを許された四人の御使いたちに、大声で叫んだ。

7:3 「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を加えてはいけない。」

7:4 私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。

終わりの日、「十四万四千人…イスラエルの子らのあらゆる部族の者」が「御使い」に「印」を押され、選ばれる、つまり認められることが預言されています。彼らは終わりの日に現れる獣、反キリストにひざをかかめず、イエシュアこそがまことの王、メシアであることを認め、ほめたたえ、宣言するものたちです。彼らこそが「神の御使いたちの前でその人を認めます」とイエシュアが言う者たちです。そしてこの「イスラエルの子ら」につながるように記されている以下の者たちもまたそうです。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:10 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」

この人々は多くの御使いたちのいる天においてまさに御座の子羊イエシュアをヤーダー「ほめたたえ」ています。このような人々が神のご計画によって起こされることを、私たちは主の御言葉として語り、聖書に示された幻を、たとえを、その「型」を解き明かしていかなければならないのです。それが「あなたがたは…価値がある」と呼ばれた私たちの果たすべき役割、働きです。

2. 聖霊が教える

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:9 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。

12:10 人の子を悪く言う者はだれでも赦されます。しかし、聖霊を冒瀆する者は赦されません。

12:11 また、人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。

12:12 言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」

「人の子を悪く言う者はだれでも赦されます。」なぜならこの事実は聖書に預言されたものだからです。こう記されているとおりです。

イザヤ書【新改訳 2017】

53:3 彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。

53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。

53:5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。

この預言はイエシュアの受難、十字架の死において成就しました。まさに人の子が悪く言われる、悪者、罪人となられたことによって「**私たちは癒やされた**」すなわち罪が赦されたのです。このように「**人の子を悪く言う者はだれでも赦されます。**」

しかし「**聖霊を冒流する者は赦されません**」。では聖霊を冒流するとは一体どういうことでしょうか。今日の箇所の内容から言えることは「**言うべきことは…聖霊が教えてください**」とあるように、聖霊は聖書の御言葉を解き明かし、その意味を教えてください存在です。その御方が今日この時間にこれを語るようにと教えて下さったことを今私は皆さんに語っています。しかしもし私が語らなかつたら、あるいは全く別のことを語ったら、私は「**聖霊を冒流する者**」です。実は私には今でも思い出すだけで震えがこみ上げてくるような経験があります。当時、私は24歳で小さな開拓教会に遣わされていました。ある日の集会で私はメッセージの当番でしたが、今思うと本当に愚かなことなのですが、全く準備もせずに「まあ、何とかなるだろ」という軽い気持ちで講壇に上がりました。すると話し始めて数秒とたたないうちに舌がもつれ、話せなくなり、さらにめまいがしてその場に倒れこんでしまったのです。決して体調が悪かったわけではありませんでした。この時明らかに私は語るべきことを教えてくださいはずの聖霊を無視し、それを聞こうともせず、返って自分勝手に語ろうとし、もう少しで「**聖霊を冒流する者**」になるところだったのです。その時私を倒れさせたのは主のあわれみだったと今でも痛感しています。ですから語る者は聖霊によって、聖霊に教えられたことを語るのです。注意していただきたいことは、ここで重要なことは赦される罪と赦されない罪があるということではありません。また誰が聖霊によって語っていて誰がそうではないかということでもありません。聖霊が聖書の真理を解き明かし、これから起ころうとしている神のご計画を教えてくださいという事実に目をとめてください。まさにこう言われているとおりです。

ヨハネの福音書【新改訳2017】

16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださいます。御霊は自分から語るのではなく、聞いたことをすべて語り、**これから起こることをあなたがたに伝えてくださいます。**

そして聖霊によって実際にこのような出来事が起こりました。

使徒の働き【新改訳2017】

2:7 彼らは驚き、不思議に思って言った。「見なさい。話しているこの人たちはみな、ガリラヤの人ではないか。

2:8 それなのに、私たちそれぞれが生まれた国のことばで話を聞くと、いったいどうしたことか。

2:9 私たちは、パルティア人、メディア人、エラム人、またメソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポント

スとアジア、

2:10 フリュギアとパンフィリア、エジプト、クレネに近いリビア地方などに住む者、また滞在中のローマ人で、

2:11 ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレタ人とアラビア人もいる。それなのに、あの人たちが、私たちのことばで神の大きなみわざを語るのを聞くとは。」

2:12 人々はみな驚き当惑して、「いったい、これはどうしたことか」と言い合った。

このように、聖霊の働きとは様々な国の言葉で「私たちのことばで神の大きなみわざを語る」、語らせるというものです。私は今、まさに私たちのことばである日本語で「神の大きなみわざ」すなわち神の国の福音、神のご計画の完成である「神の国の奥義」としての聖書を、聖霊に教えられたことをもとに語らせていただいています。ただ私が高ぶることがないように、あまり支障がない程度にあえて間違わせたり、すぐには教えてくれなかったりすることもあります。そう言った意味では、聖霊はただ聖書を解き明かすだけではなく、あらゆる面において私を訓練し、育ててくださる方です。

そして聖書における聖霊の最後の働きは、私たちにこのことをさせるものです。

ヨハネの黙示録【新改訳2017】

22:17 御霊と花嫁が言う。「来てください。」これを聞く者も「来てください」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。

22:20 これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

このように「御霊」聖霊は私たちを主イエシュアの「花嫁」として、主イエシュアよ「来てください」と言わせるものです。つまり、花婿が迎えに来るのを待ちわびる花嫁のように、主イエシュアが来られることを待望、切望、いや「渇く者」として渇望させるものです。どうぞ御霊が私たちをいよいよ主イエシュアに「渇く者」とならせ「主イエシュアよ、来てください」と声を上げる者としてくださいますように。